
月光銀花

林檎ぷりん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月光銀花

【Nコード】

N3158G

【作者名】

林檎ぷりん

【あらすじ】

真っ白な翼と長い翠の髪を纏って、彼女は堕ちて来た。何もかも忘れて。

「今度こそ、守ってみせる」

綺麗な金色の瞳の彼は、私が初めて逢った人。ずっと既視感を覚える人。

「もう逢わないよ」

思い出して。思い出させないで。

「君はいつまで逃げ続けるの？」

変わってない。今も、昔も。
「これで、良かったの？」

プロローグ

昔話をしてあげよう。天使と悪魔のお話だ。

天使の方はとっても綺麗な翠の髪に翠の瞳、白い肌。そして白鳥の様な真っ白な翼。誰が見ても美しく、それで居て誰にでも優しい。澄んだ、高い、ソプラノの声をした、白い服が良く似合う娘だったという。おまけに人としても完璧だ。人々は彼女のことを「聖女様」と言ったらしい。

……綺麗な、そして儂げな方だったらしい。私もあったことは無いがね。一度御会いしてみたいものだ。

だがちょっとお考え。常に人に見られてる、完璧な聖女を演じなければならぬ。籠の中の鳥と一緒に。そっちの方がまだマシかもしれない。その娘はある時呟いたそう。自分じゃなくても良い、自分じゃなくても皆は誰でも良い、ってな。

悪魔の方は砂色の髪に月の様な金の瞳。蝙蝠の様な黒い翼。美しい容姿をしていた男だったが、人々は恐れて誰も近づかなかったという。悪魔は人に近づかなかった。金の瞳は悪魔の印。近づいても「化け物」と言われるからだ。

……ああ、誰もが彼のことを化け物だと言った。悪魔のことを判りもしないのに。悪魔はある時言ったそう。どうして誰も認めてくれない、自分は何もしていないのに、ってな。

えっ、怖くなったかい？確かに私の瞳は金色。金色の瞳は悪魔の印、と言うからね、怖くなくても無理は無い。だがちょっとお待ち。これからが面白いところなんだから。興味は無いかね、孤独な天使と悪魔がどうやって出逢ったか。

……はっはっは、お前さんは面白い子だ。大抵の子は逃げてしまうからね。じゃあ話を続けようか。

第一話 天使は空から舞い堕ちて

黒一色で塗り潰された空間。何も視えない、聴こえない、自分の姿さえ見えない。無、そんな言葉が似合う場所に俺は居た。

『レオ』

不意に後ろから声が聴こえた。耳慣れた、澄んだ、高い、ソプラノの声。

『レオ、起きて』

後ろに振り向くと、ぼんやりと微かに光が灯った。その光が形作った人物は、俺がよく知る彼女の姿。

『起きて、レオ』

翠の髪に大きな翠の瞳、透き通る様な白い肌。何処か儚げだった彼女の姿。何故か泣きそうな瞳で此方を見てくる。

『レオ』

もう一度、泣きそうな声で、泣きそうな瞳で名前を呼ばれた。何か言おうと口を開いた時、くると踵を返して彼女が走り出す。一瞬躊躇ったが、彼女の背を追いかける様にして走り出す。

『ロビンッ』

追いついた、そう思った。名前を叫ぶようにして呼ぶと振り向いて足が止まった。腕を伸ばす。今度こそ、幻じゃない、そう思った。でも……

僅かに漏れた声が、俺の声か彼女の声かは分からなかったけれど。彼女に触れる直前、音も無く、何かが弾けた様に、ふわりと彼女は真っ白な羽根になって消えてしまった。

ふわりふわりと、数え切れない程の羽根が視界を埋めた。

少しぼんやりとした、白濁した意識の中で目を覚ました。まだ重いまぶたを無理矢理持ち上げ、凭れ掛かっていた壁から体を起こす。また、同じ夢。彼女が居なくなってから、見ない日は無いくらい何度も見た夢。見るたび見るたび、性懲りも無く必死になって追い駆けた。けして追い着けはしない事は何となく分かっていた。何故なら、彼女はもう、俺の手の届かない所に行ってしまったのだから。それは絶対に変わらないことで、覆し様の無い事実だった。

開け放った窓から入った風が髪を弄ぶ。じつとりと寝汗を吸ったシャツが冷えて、少し冷たかった。外に目を向けるともう夕方だった。どうやらかなり長い時間眠ってしまったらしい。窓から刺し込んできた西日に目を細める。窓から風が吹き込んで何かが頬を掠めた。ふわりとベッドに堕ちたそれは

「・・・・・・・・羽根？」

そう、それは手の平より少し小さいぐらいの一つの真っ白な羽根だった。どうしてこんな物があるんだろう。この辺りに白い色をした鳥は居ない筈なのに。

まさか、と思ってそれを摘まんで陽に透かしてみると、薄っすらと向こうが透けて見えた。魔力の結晶の印だ。透けて見えるということは、核から分散したのだろう。これが象るのは真っ白な羽根。俺が知っているこれの持ち主は数人しかない。

「……………ロビン？」

他にもいる筈なのに、何時の間にか零れていたのは彼女の名前。もう逢えない筈なのに。外を見ようと窓に顔を向けると、不意に強い風が吹き込んだ。思わず顔を腕で庇うと、真っ白な羽根が視界に入った。風が吹き止み、顔を庇っていた腕を下ろす。

風が運んできたのは、さっきと同じ、真っ白な羽根。ふわりふわり、数え切れない程の真っ白な羽根が視界を埋める。その光景が、さっき見た夢と重なった。でも、ただ一つ、違うことがあった。それを確認してしまうと、俺は靴を履くのもどかしく、外に跳びだした。

彼女は淡い光に包まれて、あの時と同じように真っ白な翼を背に持って。

あの時より大分伸びた長い翠の髪をふわりと纏って、羽根のように空から堕ちてきて。

受け止めれば、あの時と同じ様に、驚いた様に少し見開かれた、大きな翠の瞳があった。

第一話 天使は空から舞い堕ちて（後書き）

どうもー、前話からたっぷり三週間以上かかって、やっとこさ第一話を更新しました。呑気ですね、私。なのに登場人物は謎しかないという……。意地悪ですね私。自分で言うのも何ですが。地道に頑張ってやっていくんで見捨てないで下さい。てか、プロローグは後書きしなかったのに何で一話から？と言う突っ込みは無しの方で。さて、次からは登場人物の紹介をやっていくつもりです。それではまた、次の話で。

第二話 金と翠のエチュード（1）

頭を過ぎって消えた一瞬の既視感と、ふわりと宙を舞う感覚。意識が暗転する前、最後に分かったのは、それだけだった。

次に視界に入ったのは、切れ長の、綺麗な金色の瞳と砂色の髪。とても綺麗な顔立ちをした、私と同じ年ぐらいの男の子。一瞬の既視感が過ぎって消える。でも、誰なのか分からない。知らない筈なのに、どうして懐かしさと苦しくなる様な気持ちが湧き上がるんだろう。

「・・・・・・・・あなた、誰？」

「え？」

そんな事を訊かれるとは思わなかったのか、彼は驚いた様に目を

見開く。もう一度、誰？と問い掛けると、彼は目を逸らし、少し哀しげに目を伏せた。何処か泣きそうな表情をしている彼を見ると、何だかとてもいけないことをしてしまった様な気がして、きつとそんな表情をしていたんだろう、彼が困ったような表情で私の方を見ていた。

そのまま見詰め合うこと数十秒。沈黙に耐え切れなくなり、意を決して口を開いた。頭は真っ白で、何を言うのかすら考えて無かった。

「あのっ」

「あのさっ」

見事に声が重なり、そのまま二人でしばし沈黙。ぎこちなく固まった気まずい雰囲気の中、先に言えよ的な空気が流れる。

「えと・・・・・・・・」

「あー・・・・・・・・」

口を開いてもお互いに意味の無い声ばかり（今のを言葉を発したとは言えない。あれは声をだしたと言う方が正しいと思う）が出て来て、ちつとも先に進まない。

再び沈黙状態に陥りそうだったので、こういう場合はどうしたらいいのか考える。今までにもこういう状況があったはずだ！と私は自分を励まし、記憶を探る、いや探ろうとして思考が停止した。

全く、何も、思い出せない。

ど忘れしたとかそういうレベルじゃない。昔の記憶を思い出そうと探れば探るほど、何も無いのがより鮮明に分かってしまう。まるで真っ白な霧の中を訳も分からず歩いている様に。いや、そんなことは無い。きつと色々（色々？）あったから混乱してるんだ。

落ち着け私。私の名前は？ 名前は・・・・・・・・ロビン。私はロビン。

どこから来たの？ ・・・・・・・・どこから？

自分で考えた問に答えが見つからず、頭が真っ白になって固まってしまった私に、彼が困った様に声を掛けた。低くて、ちよつとぶっきらぼうで、優しい、そんな声。

「・・・・・・・・何で泣きそうな顔すんだよ」

「・・・・・・・・そんなことないよ」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

そんなことないよと、もう一度自分に言い聞かせる様に呟いて、少し汚れてしまった白いワンピースの裾に視線を外す。そのまま再び沈黙の無限ループ。一体全体、何時までこの状態が続くんだろう・

・・・

「・・・レオ」

「え？」

どうしようかと悩んでいると、彼が唐突に口を開いた。突然のことにびっくりして顔を上げると、一回で理解出来なかったのが苛立たしいのか（そんな唐突に言われたって誰だって分かる訳がない）、ちよつと不機嫌そうにもう一度、さっきより少しゆっくりと。

「だから、俺の名前は」

「・・・レオ？」

「そう」

しばらく考えて、さっきの、誰？　という問い掛けに答えてくれたのだと分かった。それにしても唐突だ。いや、きつと彼・・・・レオもこの沈黙が耐え切れなかったのだろう。私は勝手にそう判断することにした。

「お前は？」

「私？　私は・・・・ロビン、ロビンよ」

そう言うと、どこか安堵した様な表情を見せるレオがいた。

第二話 金と翠のエチュード（1）（後書き）

ついにヒロイン登場！！彼女は結構な美人ちゃんですよ、設定上は。でも美人って言っても綺麗って言うよりは可愛い感じの強い子です。あ、キャラ紹介を忘れるところでした。では、何か暗い感じの主人公？レオの紹介です。

レオ ♂（15歳）

一応この作品の主人公。砂色の髪に金色の瞳をもった美少年です。彼の視点だと何故か話がシリアスっぽい雰囲気になる確立が高いのはこの作品の謎です。夢を見るほどロビンのことを知っているようです。華奢な体格をしています、背は結構高い方で、180cm 近くあります。普段はクールに振舞うレオですが、時折見せる不安定さは、彼の生まれと幼少期に関係しています。まあ、その話は後々本編で。

レオについてはこんな感じです。結構彼は気に入ってます。月光銀花のシリアス担当（作者はシリアスが大好きです）。それではまた、次のお話で。

第三話 金と翠のエチュード（2）

とりあえず軽くパニックになっているロビンをなだめて、自分の名前と何となくの年齢―（誕生日は覚えていなかった）は覚えてることを確認した。

事の起こりは、ロビンが行く所が無いから出来れば家に置いて欲しいと言ったからだ。いや、別に家に置くことに特に問題は無い（むしろ父親なんかは大喜びするだろう）し、前に彼女がここに来た時もそうしたんだし、世間知らずな所があるロビンをそこらへんに置いとくのは流石に不味いと思うし、なにより……

「次、右だから」

「あ、うん」

何処か上の空でぼんやりとしているロビンに話しかけると、分かった様な返事をしつつ、見事に左の道へ逸れて行った。案の定そこらに捨ててあったガラス瓶に躓いてこけた。言わんこっちゃ無い（彼女は方向音痴だ）。

「おい、そっちは左。お前大丈夫か（色んな意味で）」

「ふえ？ ……うん。大丈夫」

幸いな事に怪我はしていなかった。が、どうもハッキリとした返事が貰えない。上の空と言うか何と言うか。そのまま彼女はぺったりと座り込んでぼんやりとイマイチ焦点が合っていない様なとろんとした大きな瞳で何処かを見ていた。

視線の先を辿って見ると何て事は無い空だった。強い西日ももう終わりに差し掛かり、黄昏時の終わり独特の、紅い雲と夜の色には

少し薄い青灰色とが混じりあった空になっていた。見ていても特に面白いものでは無いと思うのだが、何か感じる所があるのだろうか。

「何か面白いモンでもある？」

隣に腰掛けながら訊いてみた。この道はけして広い訳では無いので俺が座ると結構狭い（故に人がもう一人通る隙間なんて無いが、まあこの道を使う奴は殆ど居ないので良いだろう）。

「……何も無いよ」

じゃあこんな所で何見てんだ、と突っ込みたい気分になった。

「空を見てたの」

まるで俺の心を見透かした様に、澄んだ、高い、ソプラノの声でロビンは言った。

「空？ 何で？」

「……何でだろうね」

答えに成っていない答えが返ってきた。そのまま暫し沈黙が流れる。しかしそれでもさっきの様に気まずくぎこちない空気が流れることは無い。ただ、ぼんやりと、だいぶ紅い部分が青灰色に侵食されて来た空を二人で見てるだけで。

ちらりと彼女の横顔を見てみた。長い睫毛に縁取られた大きな翠の瞳、辺りが薄暗いせいか、少し浮いて見える白い肌、長い翠の髪。この空みたいにな、何処か儚げで華奢な姿。

綺麗で、綺麗で、とても綺麗で、触れたら壊れてしまいそうだった。

長く伸ばした髪に触れようとして、手が止まった。

『触るな』

そんな事あるはず無いのに、突然声が聴こえた。ドクンと心臓が脈を打つ。

『触るな』

『お前なんか触れて良い存在じゃない』

もう一人の俺が蔑んだ様に言う。また、ドクンと心臓が脈を打つ。

『あの時彼女を護れなかったお前が』

『触るな』

「レオ？」

「っ！」

何時の間にかロビンの顔がすぐ傍にあった。大きな瞳が少不安そうに顔を覗き込んで来る。頬に当てられた手が暖かい。何時の間にか乱れていた呼吸と頭痛が和らぐ。

「どしたの？　へーき？　大丈夫？」

「ん、大丈夫」

そう答えると、不安そうにしていた表情が和らいだ。

「良かった」

ロビンはそう言って、両手を首筋に当てて、柔らかな笑顔を浮かべた。安堵した後には笑う時の彼女の癖。……これは、やばい。色んな意味で。一旦は落ち着いていた心臓がまた脈打つ。

今度はドクンドクンなんてものじゃなくてバクバクと早鐘を打っている。何故かそれ以上見ていられなくて慌てて視線をずらした。体温がカッと上がったのが分かる。隣でロビンが不思議そうに首を傾げたのが分かった。

第三話 金と翠のエチュード(2) (後書き)

こんにちは、林檎ぷりんです。更新が遅くなってすみません。原因は分かっています。ゲームを買ったからです。お年玉とお小遣いをはたいてPSPとゲームを買って、寝る間も惜しんでカチャカチャと敵と戦い、ストーリーを進めていました。でもけしてサボっていた訳じゃありません。戦闘描写の参考にしていたんです。何時か生かされる筈です、多分。それはさておき、今回は微妙に謎っぽいものが出てきたかもしれないです。レオとロビンにどういことがあったのか、それも楽しみにしててください。と言うことで、今回のキャラ紹介は多分ヒロイン、ロビンです。

ロビン (15歳)

多分ヒロイン。長い翠の髪に大きな翠の目、白い肌に澄んだソプラノの声を持った美少女です。天真爛漫、穏やかで優しい性格をしています。その性格ゆえ、誰かが傷付いたり、傷付けたりすることを誰よりも嫌っています。白い羽根と翼を持って、空から堕ちて来ました。レオのことは今はよく分かっていないようです。

ロビンについてはこんなところです。何気に作者の最初に作った話の主人公でした。機会があればその話も公開してみたいですね。それではまた、次の話で。

第四話 優しい嘘、悲しい瞳

結局、レオの家に着いたのはとっぷり日が暮れてからになった（いや、私のせい、って言ったら私のせいなんだけど）。着いた家は、決して大きくは無いけれど、住み心地の良さそうな一軒家だった。既視感を感じた。

今日はよくこの感覚に襲われる。知らないと思っても何処かで知っていると声がする。知っていると思うのに分からないもどかしさ。得体の知れない奇妙な感覚に暫くぼんやりとしていると、鍵が開く音がした。キィ、と金属が擦れる時独特の高い音がして扉が開いた。「入れば」

そう言ってレオが家の中へ招き入れてくれたので、ありがたく上がらせてもらった。全体的に茶色やその同系色の家具で纏められた、家の外観と同じ様に、華やかさはないけど、温かい感じのする部屋だった。

奥からぱたぱたと足音が聞こえ、薄茶色の髪と綺麗なオレンジ色の瞳が印象的な男の人が現れた。柔らかい雰囲気、優しいような人だ。きつと、この部屋はこの人の趣味なのだろうと何と無く思った。

「おかえりい、レ」

その人は途中まで言いかけた言葉を中途半端にぶつ切って私を凝視した。何と無く居心地が悪く、レオの後ろに体を隠す。私がシャツを掴んで見上げると、レオが困った様な表情をしているのが何と無く分かった。

「マリア…….」

その人は大きく目を見開いて知らない名前を口にした。綺麗なオレンジ色の目が見ている。信じられない、と言うように。また、既視感を覚えた。前にも同じ事があった様な、そんな感じがした。

「父さん」

違います、と否定する前にレオが若干呆れた様に口を開いた。その言葉に、一瞬思考が停止した。

……レオの、お父さん？

そのことを理解するまでに若干の時間を要した。確かによくよく見てみれば立ち振る舞いや背格好など似てる所がある。顔立ちがきつとレオはお母さん似なんだろう。そう考えれば二人が親子だと言うのにも納得がいった。

少し何かを考える素振りをして、レオがお父さんに近づいて行って短く何かボソボソ言った。小さい上に声が低くて、何を言っているのかまではよく聴き取れなかった。でも、それを聴いたお父さんの目がまた僅かに見開かれるのを見て、何かあったのだと分かった。何か言いかけたお父さんにレオは小さく首を横に振った。そして、何だか複雑な顔をしてこっちを向いて紹介してくれた。

「あー……ロビン、これ俺の父親」

「はじ、め、まして、ロビンです」

つかえながらお父さんにむかって我ながらぎこちないお辞儀をする。

「レギオスです。よろしくね、ロビンちゃん」

レオにかなりぞんざいに扱われたにもかかわらず、穏やかに笑いながらレギオスさんは挨拶をしてくれた（それにしても自分の父親に対してこれは無いんじゃないかと思う）。

レギオスさんは紹介されても暫く目を細めて私を見ていた。穏やかに、不思議そうに、懐かしそうに。誰だか分からない、私と、私

ではない、私と良く似た誰かを重ねて見ているようだった。あの「マリア」という人なのかも知れない。でも、何故かそのことを訊くのは憚られた。

訊いてはいけない、頭の何処かで私が言った。

『かあさま
母様』

訊いてはいけない。

『母様、何処行くの？』

訊いてはダメ。

『ごめんね、』

聴きたくない。どうか思い出させないで。

『……だあれ？』

せっかく、逃げてきたのに。

『ごめんね、ごめんね』

また、あそこ鳥籠に戻らなきゃいけないの？

『ごめんね……………ばいばい、
。もう逢えないよ……………』

第四話 優しい嘘、悲しい瞳（後書き）

どうも、林檎ぷりんです。今回はロビンサイドです。そして、珍しく同じ月に二度目の投稿です。レギオスさんが出て来ましたね。実は、最初にこの話を考えたときレギオスさんはいませんでした。存在してた、のはしてたのですが、今のよう一緒に住んでたりはしてなかったですね。蛇足ですが、最近になって小説を読み返してみると、後書きの時のテンションが異常に高いことに気が付きました。さて、今回のキャラ紹介はレオのお父さんのレギオスさんです。

レギオス（♂） 37歳

レオのお父さん。薄茶色の髪とオレンジ色の瞳を持つ穏やかな雰囲気
の男性です。レオの色素を濃くしたらこの人の色になると思います。
でも顔はあんまりレオに似てません。レオはお母さん似なので、
背はレオより少し高いぐらい。作中ではあまり触れられてませんが、
彼も結構美形さんです。

彼についてはこんな感じです。レオとはタイプが違いますが、そこ
そこ仲良くやっています。それではまた、次の話で。

第五話 君を失うのが怖くて、気付けば動けなくなっていた

「ロビン？」

急に無表情になったロビンの顔を覗き込むと、ハッとしたように目を見開いた。一瞬考え込むような表情をしたものの、ふるふると頭を振って俺の方を見上げてきた。

「なあに？ レオ」

吸い込まれるような綺麗な翠の瞳が不思議そうに見てくる。とは言えまずい、何も考えてなかった。何と無く気になったから、とか言う台詞は多分、いや、絶対言えない。そして結局

「あー………何でもない」

こんなことしか言えなかった。我ながら情けない。

「レオ」

後ろから不意に父さんが声を掛けてきた。何時も感情豊か（豊か過ぎるぐらい）な父さんの声が、今日は違った。抑揚の無い、例えるなら透き紙のような、そんな感じの、酷く薄っぺらい声だった。

「何？」

違和感を感じつつ肩越しに振り返った先に見えた父さんは、声に反して、何かを問い掛けるような表情をしていた。どうしたのかと見上げてくるロビンに先に行くように伝えて背を押しやる。少しよろけながら肩越しに振り返って首を傾げていたが、父さんの雰囲気（きふき）に気付いたのかふわりと長い髪を揺らして出て行った。ロビンが階段を上がっていく音を聞きながら父さんに向き直る。

「本当に、これで良かったの」

「・・・・・・・・・・どういことだよ」

質問の意図が読めず、思わず眉を寄せて訊き返す。やっぱり薄っぺらい、でも何処か問い掛けるような声で父さんは続けた。

「ロビンちゃんが記憶喪失だってことは分かった。でも、だからこそ、尚更レオが昔のロビンちゃんを知ってることを隠す理由が分からない」

「それはっ・・・・・・・・・・」

父さんの間に思わず口ごもる。そのまま何も言えないでいる俺に、容赦なく父さんは言った。

「後々しんどいのはレオ、お前だ。それに、何時までも隠し通せる訳が無い。そんな事、良く分かってるだろう」

「・・・・・・・・・・っ・・・・・・・・・・」

言い返せない。その事実が悔しくて唇を噛む。無意識のうちに力が入っていたのか、僅かな痛みと共に血の味が口に広がる。

分かってる。何時までも隠し通せる訳無い。そんなこと、良く分かっている。

でも

それでも

「笑っていて欲しいから」
笑っていて愛しい人。誰よりも幸せに。

「もう泣かないで欲しいから」
泣かないで愛しい人。俺の全てを受け入れてくれた人。

もう

「傷付けたくないから」

傷付かないで愛しい人。何時までも純粹でいて欲しいから。

俺のことを忘れてしまったと分かったら、誰よりも、他人を傷付けることを嫌うロビンはきつと自分を責めるから。

そう言っ、その言葉が違ふことに気付く。

「……ごめん、こんなの言い訳なんだ」

そうだ、俺は逃げてるんだ。ロビンが俺を忘れてしまったことに、ロビンにとって俺は忘れてしまえるほど軽いものだったと思いたくないから。だから父さんに訊かれたときにすぐ答えられなかったんだ。単純に、自分が傷付くのが嫌だったから。あの時と同じ、泣いてロビンに縋り付いていた頃と何も変わってない。

「……分かってるよ」

思いのほか静かな声にえっと声を上げる。少し俯き加減に、俺とあまり目を合わせないようにして父さんは言葉が続けた。

「怖いよな、忘れられるのって。相手にとってそれだけの存在だったんだって思うの。俺も、そうだったんだから、分かってた筈なのに、無理言っちゃったな。ごめん、レオ」

「……別に、父さんは悪くない」

素直に謝られたのがむず痒く、ついぼそつとはき捨てるような言い方をしてしまった。

遠い記憶に想いを馳せるように、目を伏せながら言った父さんは、前にも見た事のある、少し寂しそうな表情をしていた。

第五話 君を失うのが怖くて、気付けば動けなくなっていた（後書き）

どうも、こんにちは。林檎ぷりんです。今回の話は地味に苦勞しました。連載五話目にして何故かいきなりスランプっぽいものになり、学校の体育祭やら部活やらで色んなことでバタバタしている内に何時の間にやら六月も終わりに……。さすがに月に一回も更新しないのは不味い！何よりこんなやたらスローテンポな物語を根気強く読んで下さり、待ってくれている読者の皆様に申し訳ない！と言う気持ちからスランプを微妙に脱出し、がんばりました。これからもスローテンポに進んで行くと思いますが、どうぞよろしくお願ひします。

第六話 雫と既視感と越えられない壁

……先に二階に行けて言われても、どうすればいいんだろう。そもそもこの家の構造を知らない私にどうしろと。幸いな事に階段はすぐに見つかった。うん、それは良かった。階段を上がる、うん、それも良かった。……良かったのはそこまでだった。

二階に上がったその後が困った。階段を上がったその先は三つぐらい部屋が続いていた。とりあえず適当にそこら辺をうろろしてみよう。何処に行けばいいのか分かるはずも無い。適当に開けていこうかとも思ったけどさすがに人様の家でそれは不味いと思いつつ留まった（何か見たらいけないものとかあったらいけないし）。

結局、階段に座ってレオの帰りを待つことにした。

レオ、早く来ないかなあ。

頬杖をつきながら考える。何だかレオもレギオスさんも声を掛けずらい雰囲気だった。何を話しているのかは気になったけど、覗いたり、聞き耳を立てるようなことは出来ないような雰囲気だった。気になることは他にもある。自分の記憶のこととか、何度も感じる既視感や、さっき聴こえた声とか。何で物の名前や自分の名前は分かるのに、他のことは分からないんだろう。私に分かるのは僅かなことで、他は分からないことだらけ。

分からない、
何で私に記憶が無いのか。

分からない、
何度何度も既視感を感じるのか。

分からない、
さっきの声は何だったのか。

分からないことだらけだ。何だか不安になって泣きそうになってきて、でもそれは見られたくなくて、誰も見てないはずなのに私は膝を抱えて蹲り、その中に顔を沈めた。泣いてないよ、だから、まだ大丈夫。

「ロビン？」

「レオ」

不意にレオの低い声が聴こえた。それに反応して顔を上げると、当たり前だけどレオが居た。綺麗な金色の瞳がすぐ近くにある。そのことに何だか安心して、そして何故かぼろぼろと涙がでてきた。

「え、ちょ、何で泣いてんだよ」

私の様子が戸惑ったのかレオが慌てたように言った。答えようともしも答えない。泣き止もうと思ってもなかなか止まらなくて、どうしたら良いのか分からない。何で私は泣いてるんだろう。辛いことも悲しいことも、何も無い筈なのに。

涙でぼやけてよく分からないけど、レオが何かしようとしているのか、何度か手を上げ下げしていた。でも、何時も直前で思い留まるように手を止めた。

ああ、まただ。また既視感。ずっと、ずっと感じてるこの感覚。

そんな感覚や色んなことから目を背けるように俯いてぎゅっと目を瞑る。逃げても何も変わらないのに、それでも目を背ける。涙は止まらなくても、目を瞑って、服の裾を握って。

「……泣くな」

ぽんっと私の頭に手を乗せて、掠れた声で呟くようにしてレオは

言った。目を開けて顔を上げる。一瞬だけ目が合ったけど、すぐに逸らされた。そして、本日何度目かの沈黙が訪れる。謝らなきゃ。急に泣かれたら誰だって困るよね。

「あの、レオ。えと……急に泣いたりして、ごめんなさい」
少ししゃくり上げながらそう言うと、明後日の方向を向いていたレオは少し間を空けて、
「……ごめん」

やっぱり明後日の方向を向きながらぼそっと小さな声で言った。掠れた、どこか泣きそうに聴こえた。どうしてそんな風に思ったのかは分からないけれど。

どうして？ 答えがうまく飲み込めず、疑問が湧く。

「……どうして、レオが謝るの？」

そう、レオは何も悪くない。それなのに、何で謝るんだろう。私が勝手に不安になって泣いただけなのに。顔を背けているから表情は分からない。何か言いたくて、でも声は掛けられなくて、見ていることしか出来なくて。それが何だか哀しくて。

とても哀しくて、でも。ずっと、ずっと、レオの背中を見ていることしか出来なかった。

第六話 雫と既視感と越えられない壁（後書き）

どうも、こんにちわ。お久しぶりです。最近執筆速度がどんどん遅くなっている気がします（月一更新になってるよ自分・・・）。八月はもうちょっと早く更新できると思います。コンクールさえ終われば。因みに私は吹奏楽部で受験生です。勉強しなきゃいけないのに、まだ夏休みの宿題にすら手を付けていません。

さて、今回は新しいキャラは出てきてませんね。話もそんなに進みません。レオがうじうじ悩んでた頃のロビンの話です。超絶スローテンポ。もうちょっとテンポあげていこう、自分。それではまた、次の話で。

第七話 沈黙とサンドウィッチ

いないと思うけれど、もしも、この世に神様とやらがいるのなら。

助けて下さい。現在進行形でめっちゃめっちゃ困っています。何故かと言うと、本日何回目かのレオと絶賛気まずい沈黙地獄に陥っているからです。さっき感じた既視感よりも、今はこっちの方が重要だ（既視感の正体は後で考えよう）。

相変わらずレオは顔を背けたまま、こっちを見ようとしません。見てることしか出来なくて、でも、やっぱり声は掛けられなくて。それをずっと繰り返して。……ハッキリ言って、さっきから状況がちっとも進まない。原因は私だけど。急に泣いたりしたのも後悔してる。けして他人任せにするつもりじゃないけど。だから、だから、何か喋ってくださいレオ（人間、あまりにも状況が進まないと思回路が変になるらしい。これは新たな発見だ）。いまだに沈黙状態の続く中、悶々とそんなことを思っていると、

「……下、行く？」

唐突にレオが沈黙を破った。その声で、完全に自分の世界に入っていた私は、現実の世界に引っ張り戻された。言葉が飲み込めず、まだ背を向けたままのレオをまじまじ見上げる。噛み砕いて飲み込むまでにたっぷり三十秒の時間を要した。それでもまだ飲み込めずにもう一回レオを見る。

「何？」

肩越しに振り返って、レオは少し顔を赤くしながらぼそっと言った。それが少しおかしくて、思わず笑みが零れた。すぐには収まらなくて、暫く笑っていたら、それが気に障ったのか、レオは急に私の方を向いて、屈んで顔を近づけてきた。息使い、心臓の鼓動まで聴こえてきそうなくらい、綺麗な金色の瞳がすぐ近くにある。何が何だか分からないまま、レオのゴツゴツした骨っぽい指が近づいてきて

「ふえぎゃっ」

「お前笑いすぎ」

一瞬間が空いた後、むにと頬を摘ままれた。でもあんまし痛くない。手加減してるのかな。それよりも思ったのは、レオ、体温低いなあ。私が高いだけかもしれないけど。

「お前、結構柔らかいのな。ぬいぐるみみたいだ」

「ふいふふい……」

ぬいぐるみ……これは、褒められてるのか。真面目な顔をして言うレオに、喜んでいいのか微妙な気分になりつつ、ふっと視線を感じた。レオも同じだったようで、ほぼ同時に視線を階段の下に移す。そこにはレギオスさんが居た。何故か微妙に引きつった笑みを浮かべたレギオスさんがこっちを見ながら

「軽食が出来たから呼びに来ただけど……」

そこで言葉を句切って、今度はやたらめったらキラキラした笑みを浮かべて、少しからかうような声で言った。

「お邪魔だったかな？」

「一回あの世に行ってこい、クソ親父」

何が邪魔なのか、何でレオが顔を真っ赤にして何を言っているのか。何だか良く分からない会話聞きつつ、ぼんやりと私は、そういえばお腹空いたなあ、と思っていた。

「私を食べて」と言わんばかりに、デーンと皿の上に盛られたサンドウィッチ（ジャムや果物が挿入であるのが多い）。ふわりと甘い匂いがする。美味しそう……

「どうぞ、全部食べていいんだよ」

少し笑いながら、レギオスさんはそれを進めてくれた。あれ？でも、レオはいいのかな。しっかりサンドウィッチを摘まみつつ、前に座って紅茶を飲んでるレオにそのことを質問する。

「レオは食べないの？」

「俺は甘いのがあんまり好きじゃないから」

「そうなの？ 美味しいのに」

「レオは昔から甘いものあんまり食べないからね」

へえ、そうなんだ。じゃあ何が好きなんだろう。椅子が高いのか、私の背が低いのか（多分どっちも原因だと思う）。僅かに床に届かない足をぶらぶらさせながら考える。

ああ、そういえば、と不意にレギオスさんが口を開いた。

「ねえ、ロビンちゃん」

「はい？」

「家さ、親子二人で住んでるから色々掃除とか行き届いてない所が多いんだ」

「はい」

「だからさ、しばらくレオと一緒に部屋で寝てもらってもいい？」

第七話 沈黙とサンドウィッチ（後書き）

こんにちは皆さん。八月はもうちょっと早く更新できるとか言ったのに遅くなってすみません。今回は話が進まなくて苦労しました。でも結構コミカルに書いたつもりです。あと、サブタイトルも。そろそろ新キャラを登場させたいですね。では、また次の話で。

第八話 優しさの消毒液

さあ、どうする、俺。

「しばらくレオの部屋で寝てもらってもいい？」

「あ、はい。良いですよ。レオさえ良ければ」

良くねえよ！ 否定できるならすぐにでもそうしたい。が、ハッキリ言って二階に三つある部屋の内、まともに使えるのが二つだけなのも事実だ（一つは俺の部屋、もう一つは父さんの部屋。そして最後の一つは物置となっている）。いや、でも

「何で俺の部屋なんだよ！」

「いやあ、だって家の客間とか埃かぶってて有ってないようなもんだし、女の子に三十過ぎたオジサンと寝ようとか言えないし、かと言って廊下とかでって訳にもいかないし」

「レギオスさん、私何なら廊下で寝てもいいですよ。置いてもらう身ですし」

「いや、それはダメだろ」

へろへろと笑いながら会話をする二人に頭痛がしてきた。周囲に黄色い花が飛んで見えるのは何故だろう。

「そんなに神経質になるなよレオ。レオなら多分（襲ったりしないから）、安心だし」

「何だ、その多分って」

「まあ、気にするなよ」

何なんだ一体。へろへろと黄色い花が飛ぶ会話の中で、何やかんやでちよつと本題を忘れかけていた俺に、父さんは何事も無かったようにさらりと言いつつ放った。

「じゃあレオ。後よろしく」

そして現在、俺の部屋にはロビンが居る。……結局、押しに負けてしまった。つくづく思う。父さんには敵わない（日頃へろへろ笑っている人ほどあしらえないと言うことを俺は学習した）。壁に手を当て、そんなことを考えていると、ひょいっとロビンが視界に入ってきた。何やら不安そうな表情で見上げてくる。

「何」

「レオ、何か怒ってる？」

「いや、別に。何で？」

父さんの行動に多少悩みこそしたが、別にロビンに怒ってる訳じゃない。

まあ………しいて言えば朝まで心臓が持つかが気がかりだ。「だってずっと黙ってるから」

お前にとって、俺が黙っていれば怒ってることになるのか。一瞬の沈黙の後、どこか間の抜けた空気が流れた。二人でどちらからとも無く見つめ合い………

とうとう堪えきれなくなってお互いに声を上げて笑い合う。

「あ、レオが笑った」

「何だ、その珍獣でも見たような目は」

「んー、確かにそれに近いかも。だってレオ、あんまし笑うイメー
ジ無かったから」

そう言ってベッドの端に腰掛けて、クスクスと笑いながらふわり
ふわりと足を振る。風呂上りのせいなのか、微かに石鹸の香りがす
る。ついでに言うと、髪が長いからなのか、所どころ拭ききれて居
ないところがある。

「お前ちゃんと拭けよ」

「ちゃんと拭いたよ」

「拭けてないから言ってんだ」

えー、とどこと無く不服そうな声を上げてロビンがこっちを見上
げてくる。それはあまり気にせずにタオルで適当に髪を拭いてやる
(自分のベッドが濡れるのは勘弁したい)。水分を吸ったタオルが
冷たく湿った。それ見ろ、やっぱり拭けてなかった(特に毛先の部
分が)。

「ねえ、レオ」

「何」

軽い調子で、世間話でもするような調子でロビンは言った。

「私と会った時、どんな感じだった？」

髪を拭いていた手が止まる。不思議に思ったのか、ロビンが見上

げてくる。そのまま黙っている訳にも行かず口を開く。

「・・・・・・・・人が、空から堕ちて来た」

「・・・・・・・・空から」

「うん」

「何で？」

「俺に聞かれても」

実際、こっちも何で人が空から堕ちて来たのか甚だ不思議なのだ。多分、長い人生で人が空から堕ちて来るのを見られることは早々無いと思う。

「そっか。そうだね。レオに訊いても、分かんないか。ごめんね、変なこと訊いて」

「・・・・・・・・ごめん」

何時の間にかその言葉を口にしていた。ロビンが不思議そうにしているのが見なくても分かる。自分が言ったことと同じ言葉を返されたのだから。それでも、「ごめん」と繰り返すことしか出来ない。

すると彼女は困ったように笑って、そして、こう言った。

「レオは何も悪くないよ」

それは優しさからきた言葉。でも……

優しいから、優しすぎるから。今は、それが痛い。

第八話 優しさの消毒液（後書き）

こんにちは皆さん。もう九月も終わりですね。シルバーウィークは
いかがお過ごしでしたか？私はどうしようとゴロゴロしてました（勉
強なんてしません。学生なのに、受験生なのに）。そういえば先日
友人から絵を貰いました。レオと、もう一人の未登場キャラのツ
ショットです（しかもカラー）。いやあ、いいですねえ。目の保養
ですよ。レオの絵は前にも別の友人から貰ったことがあるのですが、
それとはまた別ですね。画力のある友人をもって私は幸せです。そ
の未登場キャラもそろそろ出て来るはず。それではまた、次の話で。

第九話 A s t r a n g e p r e s e n t i m e n t

この家に来て（居候して？）から二週間ぐらい経ったある日、私はレギオスさんにお使いを頼まれた。

「レギオスさん、何か手伝うことはありますか？」

「あ、ロビンちゃん。丁度良かった。薬が出来たから届けに行つて欲しいんだけど」

よし、今日は成功した。私は心の中でガッツポーズをとる。居候さしてもらつていて何もしないのはいけないと思つて、何かを手伝おうとすると何故か殆どの割合で断られた。レオに至つては「頼むからお前は何もするな」とまで。

……た、確かに階段から滑つて落ちたりとか（頭にたんこぶが出来た。全治三日間）、お皿を持つていこうとしてお皿を割つたりとか（欠片を拾おうとして指を切った）は、この二週間の内に何度かあったけど。それにしても、薬？

「薬、ですか……どこに届けるんですか？」

「雑貨屋まで届けてくれるかな」

雑貨屋まで無事に行き着けるかな。そんな不安がむくりと頭をもたげる。そろそろレオが起きて来る頃だから道を聞いておこうかな。「はい、分かりました。そういえば、レギオスさんって薬師だったんですね」

そうだよ、とレギオスさんはメモと薬を手渡しながら答えた。なるほど、道理でここ何日か部屋に籠つてると思つた。私の不安を見計らつたようにメモには地図が描いてある。

「地図はこれに描いてあるから。場所は分かる？」

「…………大丈夫です」
多分。と心の中で呟く。

「俺も行く」

突然背後からぬつとレオが現れた。気配を感じなかった。ついでに言うのと寝起きなのでシャツがよれよれになっている。

「わっ、レオ。おはよう」

「あ…………おはよう」

「おはようレオ。そろそろその寝坊を直してくれないかな。もう十時だよ」

「だったら起こしてくれよ」

寝坊してきたのに随分な言い様だ（レオは朝に弱い。と言うより朝に起きてきたことが無い）。尊大な態度のレオを気にすることなくレギオスさんは言った。

「レオ。行くなら着替えておいで。さすがにその格好は不味いですよ」

あー、うん。と気の無い返事を返してレオはまたふらつと扉の向こうに消えていった。

「珍しいな」

小さな、細い、聴こえるか聴こえないかぐらいで呟いた、レギオスさんの声が、ひどく耳に残った。

しばらくしてレオが身支度を整えて来た。と言っても元のシャツに黒のフード付きのパーカーを羽織っただけだ（さっきの格好とあまり変わらないと思う）。

「気を付けてね」

出掛ける前にレギオスさんがゆっくりと言った。

細い裏路地をぬけた先にその店は在った。少し黄ばんだ手作りっぽい感じの看板。その前でレオは待っていると言った。一緒に来ないの？ と訊いたら、レオは小さく頷いた。その顔が僅かに強張っている。

「レオ？」

どこか様子がおかしい。理由を訊こうとして私が口を開くより先にレオが口を開いた。

「行け」

「………うん」

背中を押されて、店の扉に手を掛ける。ふと気になって、レオの方を振り返る。壁にもたれて、俯いてじっと手首を握っていた。

「レオ」

私が声を掛けるとゆっくりと顔を上げた。

「何」

「ちゃんと待っててね」

「俺はそんなに信用ないのか」

「そんなことないよ」

そんなことないけど、何だか嫌な感じがする。あくまで感じなのに、この感じが、店に行くことを渋らせる。でも、そんな感覚的なことを上手く言葉に出来ないまま、

「と、とにかく待っててね！」

と半ば叫ぶように言って店に駆け込んでしまった。後々思い返すと、とても恥ずかしいことをしてしまったと思う。

勢いよく開けてしまったせいでガランツとベルがすごい音で響いた。店の奥に居た女の人（ちょっとふくよかだ）がぎょつとしたように振り返る。うわっ、やばいことしちゃった。そのまましばらく入り口で固まってる（人が居なくて良かった。居たら絶対邪魔になってる）

「い、いらっしやい」

女の人に遠慮がちに声を掛けられた。心なしか顔が引きつっているのは気のせいだと思いたい。

「え、えと、レギオスさんから菓を預かってきました！」

そう言って（叫んで？）菓を突き出す。手の汗で袋が湿って無いことを願う。女の方はしばらくポカンとしていたけど、やがて、最初はクスクスと、それがだんだん大きくなって、そして最後には大声で笑い出した。

「そ、そんなに笑わなくても・・・」

「ああ、ごめんごめん。つい、おかしくて」

そう言いながらもその人はまだクスクス笑っている。薄暗い店内にしばらく笑い声が響いていた。

しばらくしてやっと笑いの発作が収まったのか、その人は私の顔を見て不思議そうに訊いてきた。

「おや、あんた見ない顔だね。引っ越してきたのかい」

「あ、はい。今はレギオスさんの家に住まわしてもらっています」
人に聞かれた時は引っ越して来たって言え。

レオに出掛ける前に言われた言葉だ。普通の人に記憶喪失とか言ったらややこしくなるらしい。

その人は、悪意なんて全く無い、全く持って善意の塊で。故に大きな爆弾を放り込んだ。

「こんな悪魔族が居るような所によく引っ越して来るなんて、物好

きな娘だねえ」

嵐の前に放り込まれた爆弾一つ。爆発するまで五秒前。

第九話 A s t r a n g e p r e s e n t i m e n t (後書き)

こんにちは皆さん。お元気でしたか？

さて、今回の月光銀貨はホップステップジャンプのホップかステップ（両方かも）に当たる部分だと思っています。メインの登場人物二人の一面も覗けましたね。レオは朝に弱いですがロビンが毎朝頑張つて八時頃に起こそうと努力していると思います。でも絶対起きない。学校とかに行ったら完璧遅刻常習犯ですね。

そういえば今回のタイトルは英語ですが訳は「奇妙な胸騒ぎ」です。ケータイの辞書機能を使いました。文明の利器って素晴らしいと思う今日この頃です。それではまた、つぎの話で。

第十話 既視感再来

「悪魔、族？」

その言葉に込められた、侮蔑と蔑み。ぞくりとした。さっきまであんなに明るく笑っていた人が、こんなにも何かを蔑むとき、冷たい瞳をするんだ。

そんな私の思いに気付かずに、女の人は話を続ける。

「そう。あの気味の悪い金色の瞳。あれが悪魔族の証だよ」

金色の、瞳？

ドクンッと心臓が脈を打った。

「おまけに疫病神でさ。一、二年ぐらい前にあんたみたいに綺麗な翠の髪をした、それこそ天使みたいに可愛い女の子が居ただけだね。その子ね、急に姿を消しちゃったんだよ。絶対にあいつが絡んでるんだって、みんなで噂してたものさ」

「可哀想と言えばレギオスさんも可哀想だね。あいつのせいでリエルさんは出て行ったんだし。折角奥さんを見つけたのにねえ。まあ、レギオスさんは優しいから、きっとあんな奴でも世話を焼いてるんだろうけど」

え・・・・・・・・？

侮蔑して、蔑んで。そうすることが、まるで当然のようにその人は続ける。

「まあとにかくあんたも気をつけなよ？　そいつの特徴は砂色の髪に、今言った金色の瞳だからすぐ分かると思うけど。用心するに越したことはないからね。なにせ相手は」

違う。何でも知らないのにそんなこと言えるの。

「違うっ！！　レオはそんな悪い人じゃない！！」

自分でもビククリするぐらい大きな声で叫んで、更に続けようとしたその瞬間に口を塞がれた。ゴツゴツした、骨ばった手。近くに感じる体温から、後ろから抱きしめられるような体制になっていると分かる。レオ？　何でここに居るの？

「はい、そこまで」

聴こえたのはレオより高い、テノールの声。違う。じゃあ、この人は誰？

「少し静かにしててね」

誰か分からないその人は、耳元で私に囁く。体が動かせないので首を動かしてその人を何とか見ることに成功する。

目に入ったの銀色の髪。何処と無く獣を連想させる、猫目がちの紅い瞳。レオとはちよつと違うけど、端正な顔立ちをした私と同じ年ぐらいの男の子だ。何故か、何処と無くレオと似てると思った。

「ギン、何か用かい。また何か盗もうってんじゃないだろうね」

「嫌だなあ、シェーナお婆さん。オレはもうそんな悪じゃないよ」

「嘘付け。ついこないだも釣り銭ちよろまかしてた癖に何を偉そうに」

「まあまあ、そんなカッコしないですよ。若さ故の軽いイタズラじゃ

ないか」

「まったく、本当に調子が良いんだから」

な、何なんだろうこの人。急にやってきて人の口塞いだままぺらぺら喋ってるし。私、まだ言いたいこと沢山あるのに。そもそもこのギンって人一体何時からここに居たの？ 考えれば考えるほど不信心は膨らむ。

「そう言うことで、またねおばさん」

何時の間にやら会話を終わらせ、私を引っ張って店の外に強制的に連れ出す。何が起こっているのかさっぱり分からない。一体全体この人何がしたいの！？

「別にキミに用がある訳じゃないんだけどね」

私の心を見透かしたようにギンって人は言った。じゃあ離してください。

「キミの連れに用があるんだよね」

私のじつとりとした視線に気付いているのかいないのか、その人はそのまま続ける。連れ？ 連れってことは……

「レオ？」

「そう。キミの王子様兼ナイトってどこかな」

「？ それってどう言う……」

私の質問には答えずにそのまま足を止める。少し先にはレオが行く前と同じように、じつと手首を握って待っていてくれた。私達の気配にすぐに気付いて顔を上げる。

「はーい、レオ。久しぶり」

ギンのテノールの声が響く。私を抱きこんで余裕かまして手なんか振ってる。

レオは……無言だった。その代わりに何だか肌に殺気（らしきもの）がびんびん突き刺さってくる。

「相変わらずだねえ。まあ結構好きだよ、その妙に熱血なところ。でもさ」

ひらひら振っていた手が、私の首を掴んだ。・・・・・・・・はい！
？ その手は何ですか！？

「お姫様はこっちにあるんだよ。レオ君」

いやいやいやいやちよつと待て。何格好良く言っちゃってんの。てか、何が悲しくて首絞められなくちゃいけないの。レオ何か更に殺気だしてるし、ギンなんて私の首絞めようとしてるし何か力入って苦しくなってきたし。

生まれてから、多分十五年ぐらい。何も思い出せない記憶喪失のまま死ぬ（かもしれない）なんて！

居るかどうかわかんない、むしろ居ないと思ってる神様に祈るより、私は自分で行動することにした。

痛かったら、てか痛いと思うけどごめんなさいっ。

私は心の中でギンに謝って思い切って足を蹴る。大して威力はなかった（むしろ無いに等しい）とは思うけど、抵抗されるとは思っていなかったのか首を絞める力が緩んだ。その隙に私は何とか逃げ出すことに成功する。

「ロビンッ」

腕を掴まれてぐいっと引き寄せられた。その衝撃で前につんのめってこけた。

「レオー」

見上げればレオが居る。さっきまでの勢いがどこかへ行ってしまった。思わず目頭が熱くなる。

ぎゅっとレオのシャツを掴む。涙が流れないように一緒に目も瞑った。

泣くな。泣いたらまたレオを困らせる。少し泣きそうだけど、まだ大丈夫。

「あのー、もしもし、お二人さん。オレの存在忘れないでよ」

はっ、忘れてた。そう言えばギンの目の前だった。さっきまで命の危機（少し大げさだけど）を感じていた相手に背を向けていたなんて。良かった、相手が武器をぶん回すような人じゃなくて。

やっぱり忘れてた。

そう毒づいて、ひょい、と地面を蹴る。

そして何事も無かったように軽がると屋根の上に乗って、ついでのように言った。

「ああ、そうだ。レオ」

にやりと笑ったその顔に感じるのは、レオと同じ既視感。

「キミの秘密、知っちゃったよ。その子」

第十話 既視感再来（後書き）

こんにちは皆さん。

「あれ？ この作者いつも一ヶ月に一回ぐらいなのに何でこんなに早く投稿してるの？」と思った皆さん。私も不思議です。何故か異常にハイになってこんな速度で出来てしまいました。しかも今までで一番文字数が多いです。

さて、今回はやっと新しいキャラが出てきました。あとさりげなくおばさん名前も。さあ、久しぶりのキャラ紹介は何だか怪しいギンです。

ギン 15歳

端正な顔立ちをした、銀色の髪に猫目がちの紅い瞳の少年。ロビン曰く、何処と無くレオに似てるらしいです。にやにや笑ってるかと思えば人を強制的に外へ連れ出し首を絞めるという、訳の分からん行動をする人。今回その行動で被害を被ったのはロビン。レオと面識があるっぽいです。

と言う人です。嫌ですねえ、現実こういう人が居たら。なにせ出逢って十分もしない内に首を絞められるんですから。しかし何故か友人には人気がある。何故なのか未だに分かりません。では、次の話で。

第十一話 微かな傷跡

微かに疼く傷跡は、未だに伝えるのを恐れている証なんだ。

「キミの秘密、知っちゃったよ。その子」

「キミが悪魔族ってこと、リエルさんのこと。それから」

ギンはそこで一旦言葉を切った。浮かぶのは、仮面のような、そんな笑み。

「昔居た翠の髪の子のこと」

笑みを浮かべながらギンは言葉を続ける。ロビンが心配そうに見上げてきた。色の白い、華奢な指が袖を掴む。目を合わせようとした彼女から無理矢理視線を逸らす。今は、その瞳を見れない。

「俺は」

「違うって言いたい？ ああ、そっか。正確に言えばキミは『半分』だもんね。でも事実でしょ。キミが悪魔族の血を引いてるのは」

「お前も似たようなもんだろ」

「確かに。それは言えてるかもね」

苦々しい思いで口を開く。何でこいつから見下されなきゃいけないんだ。ぺらぺら喋りやがって。至近距離だったら刺してやる。

「さて、お姫様。何か言いたいことは？」

いきなり話を振られてロビンがぎょっとしたように目を見開く。少し考えるような素振りをして口を開く。

「正直言って何が何だかよく分からない。あなたの言う『半分』がどういう意味なのかも、レオが何でこんなに嫌われてるのかも、あなたが何をしたいのかも、話の内容も全然分からない。でも」

そこで一旦言葉を切って真っ直ぐにギンを見上げる。凜とした瞳と、揺ぎ無い、真っ直ぐな声で続けた。

「でも、どんなことがあってもレオはレオよ。記憶があっても無くても、私が私なのと同じ。私に優しくしてくれたレオは、他の人が言うみたいに酷い人じゃない」

見ているこっちが怯む位強い光を宿した瞳が真っ直ぐにギンを貫く。

どうして、そんな真っ直ぐな瞳で言えるんだろう。そんな揺るぎ無い、真っ直ぐな声で言えるんだろう。あの細い、華奢な体の何処にこんな力があるんだろう。

ロビンの言葉にギンが微かに目を見開いたのが分かった。顔から笑みが消えて無表情になる。チラチラと微妙に色合いを変えながら、銀色の髪が光る。紅い瞳を細めながら低い声で言った。

「むかつく」

それなのに一瞬だけ、何故だろう、泣きそうな表情に見えた。あの時のギンと重なった。そうだ、あの時もあいつは、こんな表情をしていた。

「そういえば記憶が無いって本当だったんだね。ちょっと疑ってた

んだ」

いきなり何を言うのかと俺の方がぎょつとしていると、また貼り付けたような笑みを浮かべて

「じゃあさ、これを見ても同じことが言える？」

そう言うとなを思っただのか急に銃を持ち出してきた。あいつの髪と同じ銀色の銃。的がどっちなのかは屋根の上からなので分からない。

一瞬、あの時の記憶が蘇る。あの紅は、もう見たくない。

そして一時奇妙な間が空いた後、引き金が引かれる。咄嗟にロビンを突き飛ばす。そのせいなのか突然のことに反応が遅れたせいなのか、玉が頬を掠めた。血が自分の頬を流れるぬるりとした生ぬるい感覚があった。

「レオ！」

悲鳴を上げて駆け寄ったロビンの表情が驚いたものに変わる。理由を訊こうとして自分の表情が強張ったのが分かった。

「どうして……？」

ロビンの視線の先は俺の頬。まだ血の流れた生ぬるい感覚が残っている。

「並外れた治癒能力と、金色の瞳が多いことが特徴。かすり傷ぐらにならずに治るし身体能力もかなり高い。それが悪魔族」

流暢に笑みを浮かべてギンが言う。微かに目を見開いたまま、ロビンがギンを仰ぎ見る。

「レオは悪魔族の半分なんだよ。だから銃弾が掠ったぐらいならあつという間に治る」

ねえ、とギンが声を掛ける。

「もう一度訊くよ。キミは、これを見てもさっきと同じことが言える？」

「言えるよ」

寸分の迷いもなく、ロビンは即答した。

「何度だって言えるよ。どんなことがあってもレオはレオだから。それは変わらない」

かなり驚いたけどね、と付け足して肩をすくめた。

「本当に、馬鹿みたいにレオを信じるんだね。キミに色んなこと隠してたのに」

ゆっくりと頷いてギンを見上げた。

「信じるよ」

「あっという間に傷が治っても気味悪いとか思わないんだ」

「思わないよ。だって傷がすぐに治っても痛いもの。だからあなたがしたことはいけないことだよ。他人を傷つけたんだから」

ここは変わらないと思う。昔から誰かを傷つけたりすることをロビンは酷く嫌った。

何か小さくギンが呟いた。薄く笑みを浮かべると背を向けて歩き出す。だんだんと遠くなる背中を追いかけてようとも思わなかった。

「何がしたかったんだ、あいつ……」

これが今の正直な感想だ。今日バレた諸々のことはもうちょっと上手く説明するつもりだったのに。……まあ何時か何時かと先延ばしにしてたのは事実だけど。

「レオ」

ロビンが不意に屈んだ。華奢な白い手が伸びて俺の頬に触れる。さっき掠った所だ。

「ごめんね。痛い？」

「別に」

もう一度ごめんね、と呟くと、今度はつんと唇を尖らして、少し

怒ったように言った。

「何でそんな無茶するの」

「いや、あれは条件反射だ」

「ダメでしょ、痛いんだから」

「痛くないし、すぐ治る」

「痛くなくても、すぐ治っても、ダメ」

有無を言わせぬ強い口調で断言した。こいつ、変な所だけ頑固なんだよなあ。

「ダメだよ」

そこだけは譲れないのか、頑として言い張る。恐らくこのまま俺が頷くまで意地を張り続ける。

「……努力はする」

渋々頷くと、ロビンも頷いた。自分も努力する、という意味なのか。

「帰るか」

気がつけばかなり時間が経っていた。歩いて十五分の場所に行くだけだったのに。父さんに怒られるかもしれない。

ふわりと花のような笑顔を浮かべながら、ロビンも頷く。

「帰ろっか」

第十一話 微かな傷跡（後書き）

こんにちわ皆さん。今回は先月の好調子はどこかにいってしまったので、いつも通りのまったり更新です。未だにあの謎のハイペースが何故訪れてきたのか不思議です。

さて、今回の月光銀花はレオの秘密編その一です。そういえば今回はえらく会話が多いです。こんなに会話したの最初の二、三話ぐらいですよ。

ギンが出張ってますねえ。しかし彼が居ないと話が進まないのも事実。だってレオ暗いから話進まない。主人公だけど。書く方も実力が無いのも原因です。そういえばさりげなく物騒なことを言ってます。

次回はちょっと、いや、かなり説明っぽくなると思います。や、やっとな設定が説明出来る。頑張って書きます。それではまた、次の話で。

第十二話 秘め事を明かす時（1）

嵐の中に爆弾ひとつ。爆発するまで後0秒。

家まであと数メートルという所でレオが唐突に足を止めた。

「ロビン」

「ん？ どうしたのレオ」

「お前、先に家、入れ」

何故かレオは青い顔をして入りたがらない。自分の家なのにどうしたんだろ。

「何で？」

「何でも」

答えになってない答えを返してきたので、私が先に入ることにした（こういう時のレオは絶対に譲らない）。

私が入るとレギオスさんが顔を上げた。何か読んでいたのか膝の上には開かれたままの本が置いてあった。

「おかえり、おそかったね」

そう言ってレギオスさんは微笑んだ。いつも通りの笑顔。それなのに、何故かレオだけが冷や汗を掻いて青い顔をしている。

「それ、どうしたんだい？ レオ」

それ、が頬の血の痕だと分からないほどレオは頭が悪くないと思う。説明すればいいのに、どんどん後ずさっていく。心なしかレギオスさんの背後にドス黒いものが見るような見えないような。

「いや、別に何も。特には」

「ふーん。じゃあ説明できるよね」

「何も無いって」

「まだ意地を張るか。この強情息子が」

「どっちがだ。この腹黒親父が」

「じゃあ説明してね」

「断る」

「じゃあロビンちゃんに訊こうかなあ」

ぎょっとしたようにレオが目を開いた。ぱっとこっちに顔を向けて首を横に振る。言うなっということかな。

「ロビンちゃん」

にっこり笑ってこっちを向くレギオスさん。オレンジ色の瞳が有無を言わさぬ光で圧力をかけてくる。正直、かなり怖い。

「説明、してくれるよね」

あまりの迫力に逆らえず、がくがくと頷く。ごめん、レオ。

結局、お使いで起こった色々なことを話すことになった（しっかり椅子に座らされた。多分逃走経路を立つためだ）。

主に私が話して、所々レオが補足を入れる。最初から最後までレギオスさんは黙って聴いていた。

私達が全部話し終わると、何故かレギオスさんがレオに席を外すように言った。でもレオは首を横に振る。レギオスさんが少し驚いたような顔をした。けれど、何も言わずに穏やかに笑っただけだった。

「ロビンちゃん」

改めて私の瞳を見たレギオスさんが言う。

「何から、言ったら良いか、分からないけど。そろそろ、君にも話さないかね」

少し寂しげに笑いながら。

「ずっと隠していたことを」

何から話そうか、とレギオスさんは困ったように笑った。私にそんなことを言われても、既に何が分かっていて、何が分からないのか分からなくなってきた。取り合えず、一番疑問に思ったことを質問する。

「あの、レギオスさん」

「うん。何？」

「そもそも、悪魔族って何なんですか？」

そこから来るか、とレオが脱力したように言った。……………
だって本当に知らないだもん。

「じゃあ、まずそこから説明しようか」

レオ程じゃないけど微妙に苦笑いしてレギオスさんが説明を始めた。

「まず、ロビンちゃんは悪魔族に対してどんなことを知ってる？」

「えーと、金色の瞳が特徴で、治癒能力？ と身体能力がすごく高い。それで、何で分からないけどすごく嫌われてる……………ぐらいです」

はしよって言えば、レオみたいな人ってことだと思う。

「うん。そこまでは知ってるんだよね」

「そりゃ、具体例がここにいたらそれぐらい理解するだろ」

不機嫌そうにレオが口を挟む。まあ、確かにそうだけど。目の前で傷があっという間に治っていくのを見た訳だし、信じない方が無

理だと思う。

不意に席を立つと、よいしょ、と声を出しながらどこからレギオスさんが何かを引っ張ってきた。・・・・・・黒板？ 何でこの家に黒板が？ それにしても、何なんだろう。黒板に書かれているあのミミズのたぐったような線は。辛うじて文字に見えなくもない、かもしれない（それにしても象形文字のように難解だ。一体誰があれを書いたんだろう？）。疑問に思ったので、レオの服を引っ張って質問する。

「ねえ、レオ」

「何」

「黒板に書いてある線、何？」

「・・・・・・」

「レオ？」

何故か突然レオがむっつりと口を噤んでしまった。しまった。何か怒らせるようなことやっちゃったのかな。原因が分からないのでとりあえず自分でそれを探してみる。えーと

「こないだの朝、レオの分まで布団とったのがいけなかった？」

「・・・・・・」

「それともレオの分まで朝ごはんのパン食べたのがいけなかった？」

「・・・・・・」

「もしかしておかずのオムレツ？」

「・・・・・・」

「あっ、分かった。おやつのプリンをレオの分まで食べたのがいけなかったのね？」

うん、きつとこれだ。あれ？ でもあれはレオがくれるって言ったのに。きつと本当は欲しかったんだ。よし、次からはレオの分を残しておこう。

「レオはそういうことに怒ってるんじゃないよ」

後ろで笑いながらレギオスさんが言う。そうとうおかしかったらしく、顔を真っ赤にして目に涙を浮かべている。

「あれね、昔レオが書いた字なんだよ」

「え」

こっそりと耳打ちされた答えに、かなりびっくりする。あれが字なんだ……

しばらく目を凝らしてみるけど、何て書いてあるかさっぱり分からない。

「何て書いてあるんですか？」

「お父さん大好きって」

「嘘言うな。誰が書くか」

あ、やっと口利いた。せっかくだから本人の口から聞いてみよ。

「じゃあ何て書いてあるの？」

「……さあ」

「え」

「俺も何て書いたか忘れた」

そっかあ、それじゃあ仕方ないね、と言い掛けて、ふっと目線を下げると手首を握っている。これはレオが不安な時にやる癖だ。と言うことは

「レオ嘘吐いてるでしょ」

「いや、別に。何も」

じゃあ何で目を逸らすのかしら。納得がいなくて問い詰めようとして、視線に気付く。

「もう話してもいい？」

にっこりと笑ったレギオスさんの顔が、何だかとても怖かった。

「まず、世界にはざっくり分けると三つの種族があります」

ばんっ、と黒板を棒で叩いて説明を始める。

「まず一つ目が人間と言われる種族。寿命も短いし、身体能力も魔力もそんなに高くないし、まあ強いて言えば手先が器用なことだけが特技の種族だね」

何だか散々なこと言ってるなあ、レギオスさん。

「二つ目が獣人族と言われる種族。えーと、野生的と言うか、とにかくエネルギーシユな種族だね。一般的に。身体能力はかなり高いよ。横の繋がりが強いから、大抵のことはお互い知ってるみたいだね。そして、身体的特徴が一番分かりやすい種族でもあるんだ」

分かりやすい身体的特徴？ 何なんだろう。瞳の色とかかな。

「全員」

「全員？」

「動物の耳が付いてるんだ」

・・・・・・はい？

「動物の、耳」

「そう」

「人間の耳の代わりにですか」

「そうなんじゃないかなあ」

何とも謎な種族だ。まあ、確かに分かりやすくはあるけど。

「そして、最後は悪魔族と言われる種族。金色の瞳が多く見られるのが特徴で、身体能力も治癒能力も魔力も高い」

ここまでは私も知っていることだ。

「更に厄介なことに、神の娘である聖女を誑かしたっていうことが昔話として伝わってるんだよね。そのせいか、こういう小さい街では嫌われ者になり易い」

一瞬、ぞわりと風が吹いた。驚くほど冷たい風が。心のどこかで私が言ってる。

「神様なんていないのに」

驚くほど冷たい声で。どれほど祈り、敬ったところで見返りなど何も無いのに。何故、そんなものに縋ろうとするのか。

『私、もう、帰らなくちゃいけないの』

聴こえた声にはっとする。何、今の声。前にも聴こえた声。気のせいだよ。何も聴こえてない。

「ロビンちゃん？ 聴いてる？」

ぐるぐると回っていた思考が、レギオスさんの声で中断される。

「き、聴いてます」

途中まで。と心の中で付け足す。

「嘘ついちゃだめだよロビンちゃん。今説明なんてしてないから」
見事にばれてしまった。レギオスさんは中々策士だ。次から引っこからないように気をつけよう。

「レギオスさん。一つ質問してもいいですか」

「どうぞ」

「半分ってどういう意味ですか？」

第十二話 秘め事を明かす時（1）（後書き）

こんにちは皆さん。もう年が終わりますね。月日が過ぎるのは早いものです。

さて、今回の月光銀花は予告通り説明の話です。そのせいか字数が多くなりました。半分は関係ないことで。本当にざっくりした説明ですみません。こんなんじゃないよ！ と思っただけですみません。

次こそはシリアスな展開が、待っている。かもしれない。あと少し説明が続きます。そしたら話が進むはずだぜ！ それではまた、次の話で。

第十三話 秘め事を明かす時（2）

「半分ってどういう意味ですか？」

声に出してから、しまったと思った。それは隣にいるレオが体を強張らせたからなのか、レギオスさんの表情が目に見えて哀しげになったからなのか。どちらにしても、あまり触れてはいけないものに触れてしまったようだった。

やがて、気まずい空気が流れる中、レギオスさんが少し寂しそうに笑いながら言った。

「少し、昔話をしようか」

突然脈絡無く話が変わって、私は首を傾げる。一体何を話すつもりなんだろう。レオなら分かるかもしれないと思ってレオの方を見ると、とてもじゃないけど声を掛けられるような雰囲気じゃなかった。それほどまでに、張り詰めた空気がレオの周りを覆っていた。

「昔、一人の青年がいました。周囲からはぼけっとしてる、来るもの拒まず去るもの追わず、女たらし、女泣かせ、などの散々な評価をもらっていました。それもそうで、常に彼の周りには沢山の女性がいきました。生まれてからこの方女性に不自由したことはありません。そんなある日、その青年に好きな人が出来ました。たまたま通りかかった女性に青年は一目惚れしてしまったのです。まだ若いその青年は会って一分もしない内にその女性に「好きだ、付き合ってくれ！」と生まれて初めて告白しました。今まで告白される側だった青年が告白する側になった瞬間でした。が、会って一分では当然

のように振られました。それはそれはもう見事に。当時そこそ自分の容姿に自信をもっていた青年の心は、十分すぎる程打ち砕かれました」

何だか散々だなあ。ていうかその人、告白されたら断りにくいから断らなかっただけじゃないかな。何となくだけど、そう思った。それにしてもレギオスさんは何でこの話をしているんだろう。

「さて、生まれて初めてした告白で振られた青年は次の日からとりあえず彼女を知ることから始めました。名前、誕生日、住んでいる場所、好きなもの、嫌いなもの、好きな色、その他諸々……そして、彼女に婚約者がいることも知りました」

………ついてないと言えない。それはまあ振られてもしかたがないかな。

「しかし青年は諦め切れませんでした。取りあえず付きまとして、ひたすら付きまといました。するとまあ、もともと彼女がそんなに婚約者に興味が無かったのが幸いしたのか、付きまತ್ತたかいがあったのか、次第に彼女の気持ちも傾いてきました」

それはいかなものか。けして褒められたことでは無いような気がする。本当にその人はその女の人のことが好きだったんだ。

「やがて、青年は彼女と結婚したいと家に申し込みに行ったのです。ですが、彼女の両親はこの馬の骨とも知れぬ青年との結婚を許してはくれませんでした。その後も何度も足を運びましたが許しは貰えませんでした。やがて、とうとう痺れを切らした彼女はぶち切れて結婚を認めてくれないのなら家を出て行くと言い、それでも結婚を認めてくれなかった両親に宣言通り、青年と一緒に家を出て行きました」

とても情熱的というか、行動的な人だ。幸せかどうかはともかく、

安泰を約束された婚約者よりも、育ててもらった両親よりも、その青年を選んだんだ。

「二人は小さな町で暮らし始めました。しばらくはとても幸せな日々が過ぎていきました。やがて、二人に子供が出来ました。青年はとても喜びました。しかし、一つ心配なことがありました」
心配なこと？

「その青年は、悪魔族だったのです」

へえ、そうなんだ。

・・・あれ？ でもどうして、その女の人はそのことに気付かなかったんだろう。

「青年は隠してられるなら、彼女に自分のことを話さまいとそのまま何も言いませんでした。しばらくして、子供が生まれました。そして、恐れていたことが起こったのです」

ずっと語っていたレギオスさんの声が途切れる。歪んだ表情から、話の内容から、言わなくても分かった。生まれた子供は、

「その子供は、金色の瞳だったんですね」

そうだよ、と答えた声が苦しげで。私は気付く。この話が、誰のことなのか。

「この話はレギオスさんのことだったんですね」

「そうだよ」

気付かなかったのは瞳が金色じゃなかったからなのか、それともその女の人の優しさなのか。今は分からない。

「生まれた子供はレオのことだったんですね」

「そう、だよ」

苦しいのは自分に責任があると思ったから。もしも自分が悪魔族でなかったら、多分、何度もそう思ったんだろう。

「半分の意味も分かりました」

半分とは即ち、純粋な種族では無いということ。両親の種族が違
う、混血の子供。

そして、多分それは言えないことだ。言っではいけない、言えな
い事実。

「でも、レギオスさんはレギオスさんです。料理が上手で、少し怖
い時もあるけれど、優しいレギオスさんです」

未だに俯いたままのレギオスさんにその声を掛ける。

「それじゃだめですか？」

顔を上げてくれたレギオスさんは、少し驚いたような顔をした。
それから、ちよつと驚いたような、泣きそうな顔をして微笑^{わら}った。
つられて私も微笑^{わら}う。

ふつと隣に座るレオを見る。じつと視線をテーブルのどこでもな
い場所に向けている。鮮やかな金色の瞳が、光を無くして見えた。

第十三話 秘め事を明かす時（2）（後書き）

こんにちわ皆さん。今回はレギオスさんの過去話です。『半分』の意味も出てきましたが、多分説明するまでもなく分かったと思います。

現在のレギオスさんからしたらちよつと意外な過去でした。勘の良い人はレオの母親は誰なのか、多分分かると思います。その内てくるかも。

もうちよつとだけ、秘め事編が続きます。それではまた、次の話で。

第十四話 秘め事を明かす時（3）

鮮やかな金色の瞳が、大嫌いだった。

「レギオスさんはレギオスさんです」

何の迷いもなく、至極当然のことのようにロビンはあっさりと言いつ切った。そんなことは普通言えないから苦労しているんだ。

「それじゃだめですか？」

それじゃだめなんだよ。

変わってない、変わらない人。

誰もが当たり前のようにそんなことが言えたら、悪魔族でも、金色の瞳でも、あんな蔑んだ目で見られない。

ふわりと微笑^{わら}ったロビンが視線を向けた。大きな翠の瞳が瞬く。

「レオ」

また笑う。何がそんなに楽しいのか。澄んだソプラノの声が名前を呼ぶ。

「ねえ、レオ」

「何」

「今日のお昼は何かな」

「さあ」

「レオは何が良い？」

「何でも」

そう俺が言うと、何が気に入らないのか唇をツンと尖らせた。

「レオが冷たい」

「へえ」

そのまましばし沈黙。視線は感じない。ちらりと隣を見ると、ロビンはどこか遠くの方を見ていた。

『あなた悪魔族の人？』

ひどく嬉しそうに満面の笑みを浮かべて、

『はじめまして！』

真っ直ぐに見つめてきた、大きな翠の瞳が印象的だった。

何やかんやで時間が過ぎていき、昼が終わり夕方になり夜になっていた。

認めるのは癪だが、久しぶりに幼馴染であるところのギンに会ったりだとか、ロビンの首を絞められかけるだとか、銃弾が掠ったりだとか、父さんの腹黒い一面を見せられたりだとか、その他諸々の疲労感溢れる今日もあと数時間で終わるのだ。

何か日常の平穏をぶち壊す、もしくはひびを入れることがあった場合には寝るに限る、という自論に基づいて風呂場でシャツを脱ぎにかかると。

ぶっちゃけ日頃殆ど（というか滅多に）外に出ないので二、三日風呂に入らなくても問題はないと思う。まあ今日は外に出たし、銃弾とか掠ったりしたから風呂に入るけど。

平穏な日々が続くことをどこの誰だか分からないやつに適当に祈りつつ、ぼんやりとしながらシャツをのボタンを外す。

眠い。とてつもなく。睡眠さえとれば一週間ぐらい何も食べなくても平気なんじゃないのか。

「レオ」

唐突に聞こえてきた声に、眠気が体から突き抜けて遙か彼方にぶっ飛ばされた。本来ならこの場所で聞こえるはずの無い、いや、聞こえてはいけない声が聞こえたような気がする。

これは、うん、きつと幻聴だ。視界にある翠色は気にしない。

「ねえ、レオってば」

澄んだ、高い、ソプラノの声。

これは幻聴だ。そう思いながらも、再びシャツのボタンを閉めにかかる。

「レオッ」

目と鼻の先に幻聴の張本人がいた。ツンと唇を尖らしている。

「……何。ロビン」

「着替え。レギオスさんが、忘れ物だって」

何故それをロビンに持ってこさせる。つくづく自分の父親が考えていることが分からない。

とりあえず着替えを受け取ると、ふとロビンが言った。

「……レオは傷が沢山あるんだね」

その視線は、首と肩の境目ぐらいにある傷跡に向けられていた。『あと少して死ぬところだったんだぞ』

これが出来た時に父さんに言われた言葉が蘇る。

「レオ？」

「何」

「どうかした？」

返事をしなかったことが気にかかったのか、首をかしげながらロビンが訊いた。

「別に」

「そう？」

するりと視線を外して首に手を当てる。

「じゃあね」

それだけ言うと、ふわりと身を翻して部屋を出て行った。

心臓に悪いから出来れば二度と来ないで欲しい。

風呂からあがって自分の部屋に戻ると、そこには当然ロビンが居た。ベッドに腰掛けて、何やら厚い本を読んでいる。

「レオ」

扉を開ける音で気付いたのか、本から顔を上げてふわりと笑う。

「何読んでんの」

「『治療魔法と薬々外部治療と内服薬』」

訳が分らん。

「治療魔法での外傷治療と、病気の時に使う薬とかの本だよ」

俺の気持ちを察したのか、ロビンは補足説明をした。要するに怪我と病気の対処法みたいなものか。

「何でそんなの読んでんの？」

「……………私にも、何か、出来たら良いなって。だから、レギ

オスさんから、この本を借りたの」

考えながら話すように、ロビンはとつとつと語る。

「守ってもらっただけじゃ、だめだから」

真っ直ぐに背を伸ばして語るその姿は、華奢な体からは想像出来ないほど強く見えた。

ああ、そうだ。彼女はそういう人なのだ。

強いんだ。俺なんかよりずっと。

俺は、あの時から少しは強くなっただろうか。

『神はどうして、こんな化け物を創られたのかしら』

『気味の悪い』

『どうして・・・・・・・・・・』

『どうして・・・・・・・・・・生まれてきたの』

『どうして、そんな色で生まれてきたのっ』

『そんな色じゃなかったら、私は何も知らなくて良かったのにつ』

「違っつ、俺はっ」

「レオ？」

跳ね起きたら、翠の瞳が心配そうに揺れていた。細い月の光が辺

りを僅かに照らしている。シン、と静かで、何も音が聴こえない。
ああ、あれは夢だ。かつて、この家にいた人の。

「レオ？」

ふわりと頬に手が添えられる。

「レオ、どうしたの？」

どうかした、じゃなくて、どうした、と訊かれる。

『どうして……』

声が、映像が蘇る。

止める。思い出すな。俺は。

「違う……」

「え？」

「俺は」

そうだ、俺は。

「俺は、化け物なんかじゃない」

「うん。そうだよ」

吐き出した言葉に、あっさりと肯定の返事が返ってきた。背中が暖かくなる。

振り向くと、ふわりと笑ったロビンがいた。

「レオはレオだから。そんなのじゃないよ」

真っ直ぐに見つめてくる翠の瞳が眩しくて、顔を背ける。

「俺は」

「うん」

「俺は、好きでこんな色になったんじゃない」

「うん」

「金色の瞳なんて欲しくなかった」

「そう」

でもね、とロビンが続ける。

「私は、レオの瞳の色、好きだよ。だって、月みたいで、綺麗だもの」

それ以上の会話はしなかった。穏やかに、穏やかに。優しい時間が過ぎていく。

あの人は、認めてくれなかったけれど。
まだ強くはなれないけれど。
でも、金色は、前より嫌いじゃない。

第十四話 秘め事を明かす時（3）（後書き）

こんにちわ皆さん。今回で秘め事編は終わりです。秘め事一では、種族説明。二では、レギオスさんの過去話。そして三では、レオの気持ちを書いたつもりです。

しんどい気持ちを吐きだせる人がいるのは大事なことだと思っています。後ろ向き思考全開のレオですが、ちよっとづつ前に進めているはずです。それではまた、次の話で。

第十五話 始まりの誓い

時間よ止まれ。日々がただ穏やかである内に。

「おはようレオ！」

今日もいつものように朝っぱらからテンションの高いロビンに起こされ、下に行く途中で階段から堕ちかけたのを助け、朝食―（半分はロビンにやった）を食べ、いつものようにそこそこ平穏な日が始まる筈だった。

父さんが買い物に出かけたので、ロビンと俺は部屋で本を読むことにした。ロビンは例の良く分からない医学書を読んでいる。

本日も晴天。穏やかで暖かい、とても過ごし易い日だ。

本を半ばまで読んだところで、何かが小さく音を立てた。窓の方から気配を感じた。ロビンも何かを感じ取ったのかその方に顔を向ける。

「レオ」

「分かってる」

ロビンの言わんとすることは分かった。誰かがすぐ近くに居る。二階まで来る奴といったら、行き着くのはあいつ位しか居ない。何があっても良いようにロビンを後ろに庇う。

「おい、ギン。居るんならさっさと出て来い」

低く声を掛けると、案外あっさりと出てきた。いつものようにやりと口の端を上げている。

「こんにちは、レオ。ロビンも居るね」

きゅつと紅い瞳を細めた。後ろに庇ったロビンが、華奢な指でシヤツを付かんだのが分かった。そういえばロビンはこいつに首を絞められかけたんだった。

「そんな怖い目で睨み付けないでよ。ロビンもそんなにオレが怖い？」

あたりまえだ。首を絞められた奴にニコニコ出来るほどロビンも馬鹿じゃない。

「何の用だ」

またにやりとして、ギンは答える。

「今日は情報をあげようと思って」

「情報？」

確かに日頃家から出ないので外の状況に疎くなるのは否めないが、だからと言ってなぜギンがそれを与えにくるのか。つくづくこいつの考えが分からない。

クツと喉の奥で笑って、口の端を上げて、紅い瞳を細める。

「来てるよ」

何が。

さっきまでニヤニヤ笑っていたのに、それまでの表情を嘘のように消し去って、急に真顔になって言う。

頭のどこかで警鐘が鳴る。

『金色の瞳なんて……』

フラッシュバック。名前も知らない誰かが、いつも後ろ指を指している。

「教会の、神官と信者の団体が、来てるよ」

がんと頭を殴られたような気になった。

いつか来ると思っていたけれど、どこかでそんなこと無いと思っていた。

「今夜あたり、危ないかもね」

「今夜・・・・・・・・」

どうすれば良い。俺はどうにでもなるとして、ロビンや父さんはどうすれば良い。

何も関係が無いと誤魔化しきれるか。ロビンが悪魔族と関わっているなんて知れたらどうなるか。馬鹿正直に言うとは思わないが、雑貨屋での件もあるし、誤魔化すのは少し無理かもしれない。

父さんはどうする。半分の俺と違って、父さんは純粋な悪魔族だ。瞳の色は良いとして傷でも負ったら絶対にばれる。適当に誤魔化して乗り切れるかもしれないが、それは多分無理だ。

「・・・・・・・・その人達は、どうするつもりなの」

それまで口を開かなかったロビンがギンに訊いた。微かに声が揺れていたのは多分、何か分からなくても空気や雰囲気から読み取ったのだろう。

「さあ。その辺はよく分からないけど、聴いた話じゃ町の人を一箇所に集めるか、家を訪ねるかして一人一人ナイフで傷を付けていくらしいよ」

声にならない声を漏らして、ロビンが目を見開いた。なるほど。治癒能力の高い悪魔族を見つけるには打って付けの方法だ。仮に瞳の色が誤魔化せても、これじゃ逃げ場が無い。

「どうする?」

「どうしようもないだろ」

ギンの問いにこう答えるしかなかった。これが事実だ。

「逃げないの?」

「どうやって」

「ワープゲート使うとか」

「絶対ばれる。金も無いし、無理」

「屋根を伝って逃げるとか」

「ロビンはどうする」

「……一緒に連れて行くの?」

しまった。それを忘れてた。

「……何とかする」

それは我ながら酷く曖昧な答えだった。不透明で、具体的にどうすると言うのが全く分からない。

もし、もし仮に、教会の奴らから旨く逃げれるとしよう。

ロビンをここに置いて行くのか? 俺一人ならまだ大丈夫だ。父さんが居る。でも父さんも逃げなければいけなくなったら? それなら答えは否だ。

かと言って、連れて行くのかどうか。色々面倒なことに巻き込まれるのは間違いないし、こっちの都合で関係ないロビンを振り回すのもいけない。でも、ものを頼めるような人間関係は築いてない。

何か考えたら考えただけ思考がマイナスようになってきた。

「結局、何も出来ないんじゃないの?」

人が必死こいて考えてるところにギンが水を差す。それも事実な

ので尚更腹が立つ。

「・・・・・・・・ロビン」

大きな翠の瞳が瞬いた。何？　と言いたげに見つめてくる。

「お前は、守ってもらっただけじゃ、駄目だって言ってたよな」
一瞬間が空いて、こくりと頷く。動きに合わせて長い翠の髪が揺れる。

「でもな」

巻き込んではいけない。

でも、手放すのは怖い。また居なくなるのも、嫌だ。

あの日の自分と分かれるために。

「お前がどれだけ嫌がっても、守ってやるよ」

今度こそ、守ってみせる。

「ギン。これが答えだ」

第十五話 始まりの誓い（後書き）

皆さんこんにちわ。何だか切り良く話が新しい章に入って、この小説も一周年です。

と、言うことで新章突入です！ 何かいまいち主人公っぽくなかったレオがやっと、主人公らしくカッコいいことを言ってくれました。主人公が素晴らしく後ろ向きでも、ヒロインが首を絞められても、ここまで割とゆったりたりしたりしていましたが、これからはどんな話が進んでいく筈、です。それではまた、次の話で。

第十六話 再会の糸と鏡の裏

「いやあ、相変わらずだねレオ。聴いてるこっちが恥ずかしいよ」
手で顔を扇ぎながらギンは嫌味ったらしく言った。とりあえず、
応急処置的に明後日の方向に視線を向ける。

うん、まあ、ちよつと自分でも恥ずかしい台詞を言ったと思う。
若干後悔してないことも無いが、とりあえず答えはだしたんだから
まあ良いとしよう。

何だか微妙に気まずい沈黙が流れる中、ピクリとロビンが耳を動
かした（何で耳が動くのか不思議だ。あれか、こいつはウサギか何
かか）。

「レオ、レギオスさん、帰ってきたみたい」

ロビンの言葉を聴いたギンが、一瞬、気まずさと罪悪感が入り混
じったような微妙な表情を見せた。多分、一秒にも満たない、瞬き
をしていたら絶対に気付かないような僅かな時間だった。

そういえば、あの時以降たまに窓の外でギンの姿を見かけたが、
目が合うと今のような表情を見せたような気がする。でもそれもや
っぱり一瞬で、やっぱりニヤリと笑っていた。

階段を上がっているのか、靴音がだんだん近づいて来る。という
か駆け上がっているみたいだ。いつも穏やかな父さんが珍しい。

「帰るよ」

唐突にギンが言った。さっきまでニヤニヤして普通にしていたの
に。本当に読めない奴だ。

「帰るの？」

「帰るよ」

何故か訊き返したロビンに対するギンの返事はそっけない（俺も人のことは言えないと父さんは言っていた）。それにしても、こいつはこんなに気分の浮き沈みの激しい奴だったのだろうか。

「……じゃあ」

「レオツ」

何か言いかけたギンの言葉を遮って（多分そんなつもりは無い）父さんが部屋に飛び込んで来た。ものすごい勢いで開かれた扉が壁にぶち当たって激しい音を立てた。

「父さん」

「レギオスさん」

ひどく焦っているのか、肩で息をする父さんの様子に首を傾げる。でも、すぐに思い当たった。きっと、父さんも聴いたんだ。あの話を。

父さんは何か言いかけて、ギンの方に視線が向いた。俺もつられて視線が向く。

「ギンくん……」

少し驚いたような声でギンの名前を言った。ギンが息を呑んだのが分かった。

よくよく考えてみれば、あの時以降ギンと父さんは俺が知る限り会っていない。当たり前といったら当たり前なのかもしれないが、あの時以降ギンは殆ど姿を見せなかったし、ロビンが帰ったり色々

バタバタしていたからだろう。なので二年ぶり位になるんだろうか。

ギンはやっぱり気まずさと罪悪感が入り混じったような微妙な表情を見せた。でもやっぱりそれも一瞬で、いつものニヤニヤした笑顔と飄々とした態度に戻った。

「じゃあ、伝えることは伝えたから」

じゃあね、と言っただけ言って、ギンは背を向けた。

「ねえ」

そのまま去ろうとしたギンに、ロビンが何事も無かったかのように声を掛けた。ギンが驚いたように足を止めて振り返る。大きな翠の瞳は、怯えも、恐怖も映していない。

「どうして教えてくれたの」

ロビンの発した質問は、至極妥当なものだった。信憑性云々はこの際措いとくとして、首を絞めたり（未遂）、銃をぶっ放してきたり、今までのことを振り返っても決して友好的であるとは考えにくいギンが、何故こうして情報を与えにきたのか。

長いような、短いような、奇妙な間が空いた。

いつものニヤニヤ笑いを貼り付けた表情を作ってギンは言った。

「気紛れだよ」

発した言葉は短かった。目と目ががち合う。

かつて無邪気に話しかけてきた、絵の具のような紅い瞳は、もう居ない。

今、目の前に居るのは、奇妙な具合にどろりと濁った、血の色を連想させる紅い瞳。

紅い瞳は何も語らない。語っていても、今の俺は読み取れない。ギンは更に何かを言いかけるように口を開けて、でも何も言わなか

った。

それっきりギンは何も言わず、そのまま背を向けて去っていった。
今度はロビンも何も言わなかった。

陽の光を受けてチラチラ色を変える髪は、まるであいつのようだと漠然と思った。

お互いのことは特に何も言わなくても分かっていると思っていたのは、二年前のあの時までだ。

かつての自分はもうだったのだろう。ギンのことを何も知らなかったのか、知っている振りをしたのか。もうそれすら分からない。

分からないのは、きっと、埋められない溝が出来てしまったからだ。

二年前の、たった一発の銃声は、もしかしたらあったかもしれない、友情か何かという糸をぷつぷつと切ってしまった。

第十六話 再会の糸と鏡の裏（後書き）

こんにちわ皆さん。前回の後書きでどんどん話が進むとか言っていたのに、やっぱりゆったりでした。

さて、今回はギンの観察プラスちらっと過去のがでてきました。その辺はしっかり本編で書く予定です。さあ、がんばれ自分。それではまた、次の話で。

第十七話 迫り来るのは破滅の足音

どこまでも、どこまでも金色の影が追いかけてくる。

昔まだあの人が家にいた頃、あの人はいつもいつもぶつぶつ呟きながら、多くの人が信じていた神様に祈っていた。

神様私は罪を犯してしまいました。どうかお許してください。
早く、早くあの瞳を消してください。

物心ついた頃からずっと聴いてきたその言葉と、一心に祈るあの姿は、杭となって深く深く突き刺さって、きつと、ずっと抜けることは無いのだろう。

ふと、昔聴いた言葉を思い出した。

『早く死んでくれればいいのに』

今ではもう顔も思い出せない、名前も知らないその他大勢の誰かから言われた言葉。何度言われたか分からない言葉。それに一々傷ついていたら生きていけない。そのことを学習したのはいくつの時だったか。

だから別に、死んでくれればいいのに、とか言われてもいいけど、実際に死ぬかもしれないのは遠慮したい。

「えー、ではこれより緊急家族会議を始めます」

何やら深刻そうな表情を作って、父さんは言った（でも言っている言葉であまり緊張感が無い）。家族の定義にロビンも入っているのか、きちんとロビンもいた。

しかしなぜ、こんな色々なものがごちゃごちゃと溢れている、狭苦しい半ば物置と化した部屋でやらなければいけないのだろう。

いや、正確に言えば父さんの仕事部屋なのだが、所狭しと詰め込まれたよく分からない小瓶やら本やら何やかんやが実際の面積より狭く見せている。その上、部屋にある唯一の窓はカーテンが閉められていて、薄暗い上に圧迫感があることこの上ない。

何でこんなところでやるのかと訊いたら、「一番見つかりにくそうだから」と答えられた。

「で、何するの」

「家族会議」

何を当たり前のことを、とでも言いたげな顔で父さんが答える。いや、それは分かっているから。

「そうじゃなくて、中身。具体的に何するの」

「ああ」

そっちか、というような感じで父さんは頷いた。言わなくても分かっている。本当に危機感あるんだろうかこの人。

「とりあえず、ロビンちゃんをどうするかなんだよね」

父さんの言葉にロビンが首を傾げる。直に床に座っているので白

いワンピースの裾が埃で灰色になっていた（日頃の掃除を怠ったのが原因だ。俺には掃除しろとか言うくせに）。

大きな翠の瞳が、父さんを見据える。少し細められた瞳には、何か考えるような光が宿っていた。

「ロビンちゃん」

返事をするように瞳が瞬く。少し哀しそうな表情で父さんはロビンを見た。

「今なら、まだ間に合うよ。まだ、関係ないって誤魔化せる。レオのことは何とかするから、だから、逃げなさい。知り合いがいるから、事情を話したら、きっと置いてくれるから」

諭すような父さんの言葉に、ロビンが目を見開いた。今言われたことに抗うように、何か言おうとするように口を開きかけた。けれど、何も言えずに、ただ幼い子供のように首を横に振る。

「わ、私、駄目です。それじゃ、私、駄目です。守ってもらうだけじゃ、私だけ……」

「駄目だよ」

震える声で、必死に搾り出すように言ったロビンの言葉を、父さんはやんわりと、でも確かに否定した。

それでも何か言おうとしたロビンを遮って、二階までノックが響いた。

びくりと体が跳ねた。何故なのかは分からない。でも、これは、直感的に分かった。

誰も動けずにいると、苛立つようにもう一度ノックが響いた。扉が壊れるんじゃないだろうか。

誰ともなしに顔を見合って、十秒ぐらいで父さんが下に下りてい

った。その間にノックは何度も響いた。

嗚呼、あれは破滅の足音。どれだけ逃げても、金色の影がある限り、どこかで必ず聴こえてくる。

それはどんどん近づいて、いつかきつと、暗闇へと引きずり込まれてしまうのだろう。

第十七話 迫り来るのは破滅の足音（後書き）

こんにちは皆さん。毎日汗だくになりながら四階の教室まで上がっている林檎ぷりんです。

今回はちよつと話が短めです。まあ、あれです、プロローグとか序章とかだと思ってください。さあ、次はいよいよ話が動き出す！
かもしれないです。皆様お気付きだと思いますが、こうやって自分で話を煽ったその次は大抵そんなに動かないことが多いです。あまり期待せずに見守ってください。それではまた、次の話で。

第十八話 飛んで、墮ちる

いつもどこかで足音が聴こえていた。

分かってたよ。ずっとここにはいられないことぐらい。

分かってたよ。

ノックが聴こえた瞬間、ぐっと体を引き寄せられて、レオに抱え込まれるような格好になる。そのままレオは動かなかった。ただ、私の肩に額を乗せてじっとしてる。私も動かない。

レオがずっと気配を消して、息を殺したのが分かった。レオは自分がどういう存在なのかを理解していて、こういうことを身に着けたのは、きっとそのせいなんだ。

誰にも見つからないように、誰にも認識されないように、ずっとそうやって生きてきたんだろうか。

ぱたんっと大きな音がして、薄暗い部屋に突如として光が差し込んだ。暗さに慣れていた目にその光はやたらと攻撃的で、思わず目を細めた。

「レギオスさん？」

名前を呼んでから、しまった、と思った。

白い、ゆったりとした服。痩せたひよろひよろの体にそれを着ているから、ゆったりを通り越してだぼだぼの服にしか見えない。神経質そうな青白い顔にきつく寄せられた眉と、汚いものでも見たような目でレオを見たその顔には嫌悪の表情しか写っていないかった。

それが世間一般には『聖職者』と呼ばれる、神様なるいるかどうか分からない不確かで胡散臭いものに仕える人だった。

レギオスさんの物で狭苦しい部屋とはまた別の意味で、そこはとも狭苦しかった。

多分そんなに広くない広場らしき場所に、見渡す限り人しかいない。右も左も前も後ろもどこもかしこも人だらけだ。この町ってこんなに人がいたんだ。もうすぐ日が落ちるのに、人の熱で辺りは熱いぐらいだ。

事態が大変なことになっているのに、妙なことに驚きつつ人ごみを掻き分けて前に進む。

そもそも私が何故こんな場所に居るのかというと、あの後レオは全く抵抗することなあっさり捕まった（すぐく目つきは悪かったけど）。聖職者の人達もなんだか拍子抜けしたようだった。

その後清めの為とか何とか言って、聖水―（とは名ばかりの唯の水）を私にぶっ掛けて、結構簡単だったとか、でも気味の悪い色だなとか、勝手に無責任で失礼な言葉を言い合いながら出て行った。

「皆の者！」

貧弱で、微妙に震えた声が聞こえた。普通だったら情けない声で済まされて聞き流されるそれは、広場にいたかなりの量の人々を一瞬で黙らせた。

人々の視線を辿るとそこにはあのひよろひよろの青白い顔の聖職者がいた。時々横を見ては気味悪そうにしているから、多分レオもそこに居るんだろう。

「ここにいる汚らしい悪魔族は、人家に入り込み、そこにいた少女の生き血を啜ろうとしていたのだ」

何をどれだけ歪んで見たらそんな風に見えるんだろう。相当悪魔族に偏見を持っているらしい。

とりあえずレオに近づけないかと移動してみたけど全然近づけないし、レギオスさんとは逸れるし、人は全く減る気配を見せない。

まあ落ち込んでいてもどうにもならないので再び移動開始。といざ一步を踏み出したら腕を捕まれて後ろにひっぱられた。ついでに襟首も捕まれたので首を捕まれた猫みたいになる。

悲鳴を上げそうになった口を、大きな手が抑えた。

チラチラ光る銀色の髪が視界に入って、それが誰のものなのかわかる。

「ギン」

思わず名前を呼んでしまった。声を出したことがいけなかったのか、ギンが焦ったような表情で人差し指を口に当てた。

「どうしているの？」

また口を塞がれたりするのも嫌なので、素朴な疑問を小声で尋ね

る。

「そりゃこっちのセリフだよ。何でレオが教会に捕まってんのさ。折角教えてあげたのに」

「それは私にも分からないよ。レオあつさり捕まっちゃったし」

相変わらずバカだなあ、と酷いことを呟きながらギンは私の体をひょいっと肩の上に抱える。

「……この体制は何ですか、ギンさん」

抱えられても相変わらずちよつと高い位置にあるギンの顔を見上げる。行動パターンがよく分からない人だとは思っていたけど、やっぱり何をされるのか分からないって怖い。

「ちよつと飛ぶだけだって。そんな警戒しなくても大丈夫だよ」

……とぶ。

……飛ぶ。

……飛ぶ!?

「きゃー!! ちよつと待って! 飛ぶって何!??」

「大声出すなって! 口閉じないと舌嚙むよっ」

自分も負けないくらい大声を出しながら、よっ、でギンが大きく地面を蹴った。

ぐんつと胃が浮くような感覚の後、あっという間にぽんつと屋根の上に着地した。

「はい着地」

私を地面に降ろして、そんなに驚くことなかったでしょ? とギンはいつものニヤニヤ笑いで宣った。

そうか、飛ぶってこういう意味だったんだ。あれだけ大騒ぎしたけど、そんなに怖くなかったなあ。

でも、

「次からは心の準備時間を頂けるとありがたいです」

それにしても、このすごい人数を掻い潜ってレオの所までどうやって行こう。なるべく近くで見ようと、屋根が平らなのを幸いに、ぎりぎりの端の所ににじり寄って体を乗り出す。

ふっと、既視感を覚えた。この、上から下を見る感じにも、この体勢にも。ここよりもっと高い所から、もっと小さく見えていたような何か。

「うっわあ、すごい人。あいつどうするつもりなんだか」

呆れたように言ったギンの言葉が、耳の表層を撫でて通り抜けていく。

ああ、駄目だ。今はこんな事考えてる場合じゃないのに、それでも既視感は止まらない。

眩暈がして、一瞬世界が暗転した。そう思った次の瞬間、体が宙に浮いていた。

銀色の髪と、驚いたような紅い瞳と、伸ばされた腕。

掴まなきゃ。

今あの腕を掴まないと。

そう思っても、もう既に伸ばした所で届きはしない距離だった。

頭を過った既視感と、ふわりと宙に浮く感覚。

もう一度意識が暗転する前に目に入ったのは、真っ暗な中でもよく見える、真っ白な羽根だった。

第十八話 飛んで、墮ちる（後書き）

こんにちわ皆さん。お久しぶりです。何が起こったのか、元々遅い執筆がさらに遅くなりました。こんな拙い物語を待ってくれている人がいましたら、本当にごめんなさい（土下座）。

そんなこんなで約二か月ぶりとなりましたが、月光銀花もいよいよ盛り上がってまいりました。

果たしてロビンはレオを助けることが出来るのか？ レオはロビンを守ることが出来るのか？ 頑張れ主人公達、きっと大丈夫さ！
それでは、次の話で。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3158g/>

月光銀花

2010年11月10日14時33分発行